

平成19年度

いぶり火山マイスター検討委員会(第1回)議事録

議事1 開会

(事務局挨拶～胆振支庁地域振興部長)

20～30年周期で噴火する有珠火山地域は火山との共生が永遠のテーマとなっている。胆振支庁では、有珠火山に関する正確な知識を有する「火山マイスター」を育成し、地域防災力の向上や観光の振興に活かすことを目的に、「いぶり火山マイスター育成事業」を今年度からスタートしたところ。火山マイスター制度の仕組みを検討するためこの検討委員会を設置し、本日が第1回目の会合。今年度は、まず、火山マイスターのイメージの共有や、この地域で自立的に継続していける仕組みづくりを中心に議論していきたいと考えている。

議事3 委員長選出

北海道大学名誉教授 岡田弘氏を全員賛成で選出

(岡田委員長挨拶)

・人を育てるといふ取り組みの成果が現れるには長い時間が必要。10年、20年後に振り返ったときに、今日の会議が火山マイスター制度にとって大切な出発点だったと気づくのかもしれない。人づくりで特に難しいのは永続していくこと。委員長として、火山マイスター制度の仕組みづくりに貢献していきたい。

議事4 事業概要・事業の進め方

事業概要・事業の進め方について、別添資料で事務局が説明

議事5 意見交換

委員からの主な発言

(北大名誉教授 岡田弘)

・災害の歴史や爪痕を「見ざる聞かざる」の立場で過ごすのではなく、こうしたものも含めて有珠火山というものを学び・見せる時代へと変化してきたのではないか。

・1977噴火に伴う地殻変動で倒壊した旧三恵病院が火山遺構公園として整備されている。昭和新山の散策路もおもしろい素材である。来て欲しいというメッセージあれば見所はいっぱいあるはず。

・洞爺湖・有珠山地域は、ユネスコで進めているジオパーク構想の有力候補。洞爺湖サミットと連動した機運醸成の動きもある。

・火山マイスター制度を検討するに当たっては、自然とどう向き合うかを含め、あまり狭く考えないほうがいい。自分で研鑽して学んでいく仕組み、横のつながりで人を作る姿勢が重要。

(北大名誉教授 宇井忠英)

・火山との共生のためには、いい案内役が必要。火山マイスターはその案内役になりうる。

・火山マイスター制度は、一過性で終わらないような地域に根ざした仕組みにしなければならない。

・次の噴火に備えた地域防災のリーダーを育成するという観点では、有珠地域に縁もゆかりもない人は、あまり火山マイスター制度にはなじまないのではないか。地域で活躍している人、これまでも学習会に参加している人などを対象に考えるべき。

・どういう制度なのか、地域住民に正しいメッセージを与えないとだめ。少しでもたくさんの地元の人に関心を持ってもらうことが大切。

(三松正夫記念館館長 三松三朗)

・昭和新山での学習会など、フィールドでの活動を仲間の手を借りながら行っているが、年齢的にそう長くはできない。火山マイスター制度で任せられる人材が育てばいいと思う。

・有珠山は、1977噴火で立ち入り規制した区域が未だに規制されたまま。これでは、せっかくの観光資源が埋もれてしまう。規制区域内での活動のお墨付きとして火山マイスター制度が機能することに期待する。

・来年度の火山マイスター認定にこだわるのではなく、当面、賛同する仲間集めの活動を進めることから始めるべきではないか。そうした活動の中から将来、火山マイスターとして認定できる人材が育てば、目的は達成されたとしていいと思う。

・エコミュージアム友の会では、有珠山ロープウェイ山頂駅～火口原展望台でガイド活動している。ガイド後に火山に興味を持ったお客さんの変化が、ガイドにとっての励みとなり、それがまた学びのきっかけになっている。

(壮瞥町 総務課長田鍋)

・ジオパークとは、世界遺産の地質バージョンみたいなもので、世界には約50カ所あるが日本にはまだない。洞爺湖・有珠山地区は有力な候補の一つとなっていることから、8月末頃には、エコミュージアム推進の取り組みとして、ジオパークをテーマとしたフォーラムを準備しているところ。

・火山マイスターとエコミュージアムは基本的なねらいが重なっているので、連携してやっていきたい。

(有珠山ガイドの会会長 土井鉄雄)

・1～2回の講座でマイスターの称号与えていいのか疑問。マイスターとは高いレベルの人に与えられるべき称号。マイスターの称号に値する人材を育成して欲しい。

・火山マイスターは、育成するだけでなく、活用する仕組みもなければ続かない。

(有珠火山防災会議協議会 阿部正義)

・立ち入り規制区域の解除は、今は学術関係者に限っている。場合によっては、他の活動についても解除したいが基準がなく、基準を設けるのも難しい状況にある。火山マイスター制度を活用すれば解除のルール作りが可能となるかも。

(NPO法人有珠火山の会理事長 仲島輝夫)

・有珠火山の会ではいろいろな学習会などを主催しているが、やはり年輩の参加が多い。若い人の参加が一つの課題となっている。

・9月に、兵庫県の舞子高校（日本で唯一防災学科がある高校）と有珠火山地域での学習会を行うプランを企画中。

(洞爺ガイドセンター代表 小川祐司)

・火山に興味のある若い世代は確かにいる。また、子供に見せたい、体験させたいと思う若い親もいる。しかし火山マイスターが、防災の担い手であると同時に、火山のことも、動植物のことも何でも知っていなければならないとなると、負担が重く感じてしまうのでは。

(洞爺湖自然保護官事務所 鈴木祥之)

・洞爺湖地域では、体験型観光が大切と地元が認識していると感じる。火山マイスター制度は、そのきっかけとなるはず。

・火山マイスターには、小中学校の総合学習の講師や、温泉など火山に関連する恵みの部分でも

観光ガイドとして活躍の場があると期待している。地元の有珠に登ったことのない小学生がいるのは悲しい。

・おそらくこの制度を機に国立公園特別保護地区内でガイド活動することになると思われるので、有珠火山地域の保護のあり方を検討する必要がある。保護と利用のガイドラインを作れば良いと思う。

まとめ

・「いぶり火山マイスター育成事業」の取り組みの柱を次の3つとする。

- 1 火山マイスターへのレベルアップをサポートする
- 2 火山マイスターを認定する
- 3 火山マイスターが活動する環境を整える

・各団体が実施する研修会、学習会などの行事予定を情報共有し、火山マイスター制度の検討に活かしていく

・専門部会で具体的な検討を進め、次回の検討委員会は秋頃開催する。